

Title	修験の縁起の研究 一正統な起源と歴史の創出と受容 —
Author(s)	川崎, 剛志
Citation	大阪大学, 2022, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/87731
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

氏 名 (川 崎 剛 志)	
論文題名	修験の縁起の研究 ―正統な起源と歴史の創出と受容―
論文内容の要旨	
<p>本論文は、平安後期から鎌倉後期にかけて、修験が三国伝来の日本仏教の正統の枠外から枠内へと転じ、顕・密・修験という新たな正統の枠組みが提示されるに至る過程で、『箕面寺縁起』『大峯縁起』『金剛山縁起』など、霊山の起源と歴史を記す縁起とその言説が本来の時空と機能を離れても受容され、仏教の一道としての修験の正統性を保証する機能を果たしたことを解明するものである。</p> <p>本論文の課題と対象は寺社縁起の研究と修験道史の研究が交わる場所にあるため、本論文の前提となる各研究史上の要点を示しておく。まず寺社縁起の研究は近年活況を呈し、学際的に豊富な成果が蓄積されてきた。それらうち本論文で重視するのは縁起の社会的機能であり、その分析のための基礎理論はヘザー・ブレア（2015）に拠る。ブレアによると、縁起を所持し、提示する者と、それを受ける個人、集団、共同体との関係によって、縁起の意味と機能は可変的に現れるという。本論文では同理論を応用して、本来の時空とは別のところで、現在のありようを支えるのにふさわしい過去の証拠としてそれらの言説が利用された事例にも注目して分析する。次に修験道史の研究は新たな局面を迎えており、平安後期から鎌倉時代にかけて修験道は成立したとする通説が長谷川賢二（1991）等によって改められつつある。長谷川によると、修験道を仏教の一道と捉えるとき、顕・密・修験が一体として認識され始める鎌倉後期に修験道は成立したとみるべきだという。本論文もその立場に従う。</p> <p>本論文では、まず第一章で霊山の興隆と縁起の書写・類聚との関係について分析し、次に第二章から第四章までで個別の縁起の偽撰と受容の諸相を分析する。そして第五章で参詣や苦行を和歌に詠む高位の僧俗の行為を分析し、第六章で修験の祖師、修験に関わる祖師の伝記の変容を分析する。</p> <p>第一章「院政期における大和国の霊山興隆と縁起」では、『諸山縁起』『大菩提山等縁起』（いずれも平安後期～鎌倉前期撰）を主な材として、院政期、興福寺による大和国の領国化の一環として霊山が興隆され、縁起・記録・口伝等の書写・類聚による霊山の秘密の掌握とそれを踏まえた修行や修造が行われたことを述べる。『諸山縁起』は大峯・葛木峯・一代峯の縁起・記録の類聚、『大菩提山等縁起』は大峯の縁起・記録の類聚で、両書間で類似する記事が数件ある。両書所収の縁起・記録の本文や奥書には興福寺僧の名が散見し、同寺創建以来、彼らが霊山の信仰を担い、秘密を掌握してきたかのような印象を与えるが、それらの記事は両縁起以前に類例がなく、興福寺僧や興福寺出身の遁世僧らが上述の如く装うために改竄したと推断できる。</p> <p>第二章「『箕面寺縁起』―真言密教の血脈への加筆―」では『箕面寺縁起』（平安後期撰）の偽撰と受容を分析する。同縁起は、夢中、箕面滝で龍樹菩薩から灌頂らしき所作を受けたのを機に役行者が箕面寺を創建したと記す。龍樹菩薩は真言の付法の第三祖、伝持の第一祖である龍猛と同体と信じられていたため、本件は大日如来から弘法大師に至る真言密教の血脈に傍流を加えるのと同義といえる。本章では、平安後期、同縁起の出現を機に寺内の時空の認識が一変し、参拝路が新設されると同時に、早くから寺外でも受容されたこと、鎌倉中期には修験の祖師、役行者の主要な事績と認知され、鎌倉後期には真言宗の大寺院の一部でも本件が容認されたこと述べる。上記のうちとりわけ真言宗寺院での容認は現代の常識では想像しがたいが、醍醐寺との真言宗本末相論で東大寺東南院が本件を引いて東大寺創建以前から日本に真言宗があったと主張した例（「東大寺三重訴状案」）や、勸修寺慈尊院の栄海が『真言伝』で日本における密教受法の筆頭に役行者を配した例などを提示できる。</p> <p>第三章「『大峯縁起』―奉納された縁起―」では『大峯縁起』（平安後期撰）の偽撰と受容を分析する。その原態は不明ながら、現存伝本によると同縁起は主に熊野三所権現と金峯山金剛蔵王権現及び役行者の天竺以来の由来を記し、役行者とその母から始まる二通の相伝次第を備える。第一節「真福寺本熊野金峯縁起群と天理本系『大峯縁起』」では、伝本の調査と本文の比較から、まず前者六軸（鎌倉後期写）が順次撰述され、次に主に前者の類に拠っ</p>	

て後者一編（南北朝時代写の本奥書）が撰述されたと推定する。第二節「『熊野権現金剛蔵王宝殿造功日記』という偽書」では、真福寺本縁起群の同日記は偽書であり、公家日記を参照しつつ内容や日時に大幅な改変を加えて、「大峯縁起」に導かれて白河院が熊野・金峯山に参詣し、熊野本宮で縁起を御覧になったとの筋書きを構えたことを実証する。第三節「『大峯縁起』の出現と奉納、奉納後」では、平安後期、葛木峯東麓の荘園知行権をめぐる相論を機に「大峯縁起」が現れたこと、鎌倉後期、「縁起」が大峯に奉納されたとの説が現れ（『本朝諸社記』ほか）、「縁起」と関連する記録群や、奉納されなかったはずの「縁起」そのものを標榜する書物が現れたことを述べ、うち後者には天台宗寺門派の主張がみえることを指摘する。加えて、江戸時代には歴代の聖護院門跡が「大峯縁起」を相伝したと注記する系譜が現れたことも指摘する。

第四章「『金剛山縁起』一仏典に載る霊山一」では、葛木峯の主峯金剛山を『華嚴経』の同名の山に同定する説の成立（平安後期）と受容、及び『金剛山縁起』（鎌倉中期撰）の偽撰と受容を、二度の修造との関係に注目して分析する。第一節「日本国「金剛山」説の成立」では、平安後期以降、興福寺覚憲一貞慶師弟を中心に金剛山を『華嚴経』に載る同名の山に同定したこと、興福寺別当雅縁の勧進による建仁頃（1201-04）の修造では、貞慶が供養願文に上記の説を織り込み、加えて王法・法相擁護を強調したことを述べる。第二節「『金剛山縁起』の撰述と受容」で取り上げる同縁起は、役行者の記録からの抄出の体をとる内院縁起と外院縁起、及び年代記から成る。内院・外院の呼称は金剛山を兜率天の両院とみたことによる。同縁起は壮大な景観とその由来、歴代の天皇と諸宗の高僧らによる篤い信仰の事績を連綿と記すが、大半が虚構とみられる。弘長頃（1261-64）の金剛山山伏真祐の主導による大規模修造を機に『金剛山縁起』が偽撰されたと推定し、鎌倉後期以降、大和国とその周辺の律宗寺院を中心に受容されて史実と認知され、僧伝や史書の記述に多く採用されたことを提示する。

第五章「熊野御幸再興と笙窟冬籠りの詠歌」では、鎌倉中期以降、熊野三山検校が天皇家や摂家出身の高僧の職となった状況下、上皇と臣下が熊野御幸の歌を詠み、また高僧が笙窟冬籠りを詠む行為を分析する。第一節「熊野御幸の再興と勅撰和歌集」では、再興後、二度の熊野御幸で嵯峨院と西園寺実氏の詠んだ歌が同院下命の勅撰集『続後撰和歌集』『続古今和歌集』神祇歌に入集し、後続の勅撰集でも過去の上皇の御幸の詠が要所を占めたことを指摘し、再興された熊野御幸がなお国家的行事の一と認知されていたことを述べる。第二節「笙窟冬籠りの詠歌」では、貴種の笙窟冬籠りの初例とされた行尊の「もらぬいはや」の詠歌の受容史を確認した上で、熊野三山検校の静仁法親王が行尊歌を踏まえて自らの苦行を詠んだのは、行尊の後継者を自認し、誇示するためであったと推定し、生前は叶わなかったが、勅撰和歌集への入集を強く望んでいたことを指摘する。

第六章「修験の歴史の創出」では、修験の祖師、修験と関わる祖師の伝記の変容を分析する。第一節「智証大師の熊野参詣」では、平安後期、天台宗寺門派の高僧により熊野御幸の先達や熊野三山検校職が独占された状況を反映して、同派内で、正伝に記されない祖師智証大師の熊野参詣の事績が熊野本宮の法華八講会の由来として伝えられていたこと、鎌倉時代以降、汎宗派的にその事績が容認されたことを述べる。第二節「当麻寺流記」の（発見）」では同流記（鎌倉前期撰）の偽撰と受容を分析する。同流記は当麻寺の創建と移築、及び曼荼羅織成の奇跡を記す。平安後期以降、当麻曼荼羅信仰が京・鎌倉をも巻き込んで高揚するなか、従来の真名本縁起の内容の不備を解消すべく、『建久御巡礼記』を参照しつつ、宝亀六年（775）の公的記録「当麻寺流記」が偽撰されたことを述べる。また、当麻寺が葛木峯にも属することと関わって、同流記以前から役行者が移築を主導したと伝えられてきたが、役行者が百済から四天王像を飛來させる条は前例がない。そもそも様式の異なる本尊弥勒像と四天王像がともに金堂に安置されたのは、治承四年（1180）の兵火、寿永三年（1184）の金堂再興以降であり、上記の条はそれを移築時の奇跡として説明したものと推断できる。

以上、平安後期から鎌倉後期にかけて、霊山の縁起がそれぞれ固有の時空で求められ、現れ、伝えられたこと、やがてそのうちのいくつかの縁起が固有の時空や組織から切り離されたところでも受容され、解釈し直され、転用され、修験の起源と歴史を示す縁起として機能するに至ったことを述べてきた。験力のへの評価と期待の高揚、祖師役行者の確立と荘厳といった平安後期以来の動きに加えて、後嵯峨院政下、熊野三山検校が天皇家や摂家出身の天台宗寺門派の高僧の兼帯すべき職となり、鎌倉後期、顕・密・修験という新たな日本仏教の正統の枠組みが提示されたのは大きな転機であり、上述の状況のもと、修験の包摂を目指す顕密寺院が深く関与するかたちで、修験を含む、三国伝来の日本仏教史の叙述が再構築されたと結論づけることができる。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (川崎 剛志)	
	(職) 氏 名
論文審査担当者	主 査 大阪大学 教授 飯倉 洋一 副 査 大阪大学 教授 滝川 幸司 副 査 国際日本文化研究センター 荒木 浩 教授
論文審査の結果の要旨	
以下、本文別紙	

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 修験の縁起の研究 -正統な起源と歴史の創出と受容-

学位申請者 川崎 剛志

論文審査担当者

主査 大阪大学教授 飯倉 洋一

副査 大阪大学教授 滝川 幸司

副査 国際日本文化研究センター教授 荒木 浩

【論文内容の要旨】

本論文は、申請者の論文集『修験の縁起の研究-正統な起源と歴史の創出と受容』（和泉書院、2021年2月刊）を学位請求論文として提出したものである。平安後期から鎌倉後期にかけて、修験が三国伝来の日本仏教の正統の枠外から枠内へと転じ、顕・密・修験という新たな正統の枠組みが提示されるに至る過程で、『箕面寺縁起』『大峯縁起』『金剛山縁起』など、霊山の起源と歴史を記す縁起とその言説が本来の時空と機能を離れても受容され、仏教の一道としての修験の正当性を保証する機能を果たしたことを文献学的に跡づけ、解明しようとしたもので、序章と終章を加えて全八章から成り、A5判219頁におよぶ分量である。

本論文は寺社縁起研究と修験道史研究に関わる。前者の文脈で本論文が重視するのは、寺社縁起の社会的機能である。縁起を所持し、提示する者と、それを受ける個人、集団、共同体との関係によって、縁起の意味と機能は可変的に現れるというヘザー・ブレアの論を応用している。後者の文脈では、平安後期から鎌倉時代にかけて修験道は成立したとする通説に対して、顕・密・修験が一体として認識され始める鎌倉後期に修験道は成立したとみるべきだとする長谷川賢二(1991)の説があり、本論文は長谷川説の立場に従っている。

第一章では、霊山の興隆と縁起の書写・類聚との関係について分析し、次に第二章から第四章まで個別の縁起の偽撰と受容の諸相を分析する。第五章で参詣や苦行を和歌に詠む高位の僧俗の行為を分析し、第六章で修験の祖師、修験に関わる祖師の伝記の変容を分析する。

第一章「院政期における大和国の霊山興隆と縁起」では、『諸山縁起』『大菩提山等縁起』（いずれも平安後期～鎌倉前期撰）を主な材として、院政期、興福寺による大和国の領国化の一環として霊山が興隆され、縁起・記録・口伝等の書写・類聚による霊山の秘密の掌握とそれを踏まえた修行や修造が行われたことを述べる。

第二章『箕面寺縁起]-真言密教の血脈への加筆-』では平安後期撰の『箕面寺縁起』の偽撰の生成と受容を分析する。

第三章『大峯縁起]-奉納された縁起-』では『大峯縁起』（平安後期撰）の偽撰と受容を分析する。

第四章『金剛山縁起]-仏典に載る霊山-』では、葛木峯の主峯金剛山を『華嚴経』の同名の山に同定する説の成立(平安後期)と受容、及び『金剛山縁起』（鎌倉中期撰）の偽撰と受容を、二度の修造との関係に注目して分析する。

第五章「熊野御幸再興と笙窟冬籠りの詠歌」では、鎌倉中期以降、熊野三山検校が天皇家や撰家出身の高僧の職となった状況下、上皇と臣下が熊野御幸の歌を詠み、また高僧が笙窟冬籠りを詠む行為を分析する。

第六章「修験の歴史の創出」では、修験の祖師、修験と関わる祖師の伝記の変容を分析する。

以上、本論文は各章の論考を通して、平安後期から鎌倉後期にかけて、霊山の縁起がそれぞれ固有の時空で求められ、現れ、伝えられたこと、やがてそのうちのいくつかの縁起が固有の時空や組織から切り離されたところでも受容され、解釈し直され、転用され、修験の起源と歴史を示す縁起として機能するに至ったことを述べている。験力のへの評価と期待の高揚、祖師役行者の確立と荘厳といった平安後期以来の動きに加えて、後嵯峨院政下、熊野三山検校が天皇家や撰家出身の天台宗寺門派の高僧の兼帯すべき職となり、鎌倉後期、顕・密・修験という新たな日本仏教の正統の枠組みが提示されたのが大きな転機となり、修験の包摂を目指す顕密寺院が深く関与するかたちで、修験を含む、三国伝来の日本仏教史の叙述が再構築されたと結論づけている。

【論文審査の結果の要旨】

本論文は、修験道が仏教の埒外から顕密と並んでその中心に位置するようになるという歴史において、修験の正当性を支える言葉と書物が、加筆・改ざん・捏造される過程を文献学的に明らかにしているが、その際、序章で述べるように、縁起の果たした社会的な機能に着目するヘザー・ブレアの基礎理論を根底においているため、全体として揺るぎのない論理的基盤の上に各論が構築され、非常な説得力を持つこととなっている。

第一章では、平安後期、興福寺が金峯山を頂点とする大和諸霊山の掌握を図り、口伝・縁起を収集し、霊山の信仰史のなかに興福寺僧の関与を刻みつけるために加筆・更新していく動きを鮮やかに浮き彫りにしている。

第二章では、役行者の箕面寺創建の由を記した『箕面寺縁起』が内外で広く受容された様子を実証し、特に巻末の八句偈を利用して、興福寺僧が霊山の時空とその意味を更新したことを解明した点は高く評価できる。

第三章では、第一節で真福寺本熊野金峯縁起群の書誌学的・文献学的調査で役優婆塞事一軸を縁起群と一具であるとし、天理本系『大峯縁起』との関係について従来説を否定し、第二節では、同縁起群のなかの「造功日記」が捏造された偽書であることを証明し、第三節では寺門派が熊野三山検校職独占の権威化を図るため「大峯縁起」の相伝への寺門派僧の関与が書き加えられたことを明らかにした。大峯縁起の複雑な生成・捏造過程を緻密に解き明かした点に大きな学術的意義が認められる。

第四章では、金剛山が『華嚴経』に載る霊山であるとする『金剛山縁起』が国家的な金剛山修造事業に深く関わって偽撰されたこと、これが他書に撰取され、やがて史実として定着したことを丁寧に論じている。

第五章では、熊野御幸の和歌が勅撰和歌集に重要な位置を占めていたことを指摘し、熊野御幸の国家的事業として重要性を浮かび上がらせ、第六章では寺門派の祖師である智証大師の熊野参詣の史実化過程、『当麻寺流記』の文芸的な意匠をこらした偽撰をあぶりだすなど、対象とする縁起テキストを重層的・複眼的にとらえるとともに、文学史・宗教史との関わりを十分考慮した厚みのある叙述になっている。

以上のように、本論文は、原資料の緻密な文献学的研究でありながら、修験道史のあらたな地平を拓くダイナミックな展望を示したものとして、修験道史研究史上、非常に重要な成果であると評価することができる。

錯綜した文献群の系列や先後関係についてはもう少し分かりやすい叙述であってほしいが、本論文が学際的かつ国際的な関心のある問題系を正面から扱い、修験道史研究に一石を投じたことには、高い評価が与えられてしかるべきである。よって本論文を博士（文学）にふさわしいものと認定する。